

## 戦後七十年に寄せて

### 戦後高山の文化活動の二コマ

小鳥 幸男

手許にある『高山市文化協会創立五十周年記念誌』に、私はこんなことを書いています。「今思えば、不可思議とさえ考えられるような、終戦当時の食糧不足、物不足。飢餓状態の北朝鮮や、アフリカの報道を見ながら、それに近かったかつての日本のことを思う。国民は食べ物だけに飢えていたのだろうか。食べ物と同じように、文化や、娯楽にも飢えていたのであった。」

そんな状況の中の昭和二十四年四月三十日、高山市文化協会は生まれた。主な事業といえば、現在も続いている史跡めぐりと文化祭(文化

フォーラム)などがあるが、頻繁に行われていたのが文化講演会であった。

先日、家内が通っている書道塾の人から「何か参考になれば」といただいで来た一枚の写真を。



昭和40年11月6日 文化講演会の出演者推定

前列に腰掛けておられるのが真木 潔さん。真木さんは、後に文化協会の会長に就かれるが、普段はあまり表に出ず、専ら知恵袋として舞台廻しに徹しておられた。この写真は、昭和四十年十一月六日に高山商工会議所会議室で行われた文芸講演会の出演者の貴重な記録。

前列真木さんの左側が「蜜の河」で直木賞を受賞した伊藤桂一氏。当日の演題は「歴史文学と私」であった。次に、「孤愁の岸」で直木賞を受賞した吉川英治門の杉本苑子氏。その左は、「炎環」で直木賞を受賞し歴史小説で活躍した永井路子氏。次のベレー帽をかぶっておられるのは、「はぐれ念仏」で直木賞受賞の寺内大吉氏。後列右端はゾルゲ事件の真相解明に携わる文芸評論家尾崎秀樹氏。その左は、今回の講演会開催に協力してくれた大衆文学研究会の担当係員という、錚々たる顔ぶれであった。

「風目(目)」

戦争中のあの明治神宮外苑での学徒出陣壮行会は、あまりにも有名だ。雨の中、泥水を跳ね上げての一条乱れぬ整然とした分列行進は、当時の映画ニュースで全国に伝えられた。

終わってみれば、それは敗戦に向かつての死の行進であった。雨の中の悲壮感漂うシーンが、その後何千回、何万回と新聞やTVなどで使われた。

行進をする一人一人には、それぞれの事情があり、何を考えていたとしても、全体としては送る方も送られる方も一糸乱れぬ整然としたものであった、ということになっていく。

しかし行進の出口のところへは、堪りかねた女学生の群れが殺到したという。無言のままのその顔は、皆雨と涙でズブ濡れだったそう。このシーンは記録には残ってはいない。

「死なないで」とは言えなかつた時のその涙は、腹の底からの種の保存本能のような命の叫びだったと思う。

また八月十五日が来る。

(ガンモン毛筆)

## 道伝えの日 歌集 お月見歌会

高山市文化協会では、高山市文化伝承館において「道伝えの日」事業を行っています。その一環として、仲秋の名月(9月27日)にちなみ広く短歌を募集し、「お月見歌会」を開きます。

選者に、短歌結社「新アララギ」代表で日本短歌クラブ幹事の雁部貞夫先生をお招きし、優秀作を選びます。また、雁部先生から、作品の講評やアドバイスも受けられますので、ぜひ、ご応募ください。優秀作は、広報「高山の文化」に掲載させていただきます。

- 募集作品**
- 一般の部 課題歌「月」 一首 自由歌 一首
  - 高校生の部 課題歌「月」 一首
- 応募方法**
- メールまたは郵送で(必ず住所、氏名、電話番号を記入、高校生は学校、学年も)。
- 郵送先 〒506-0053 高山市昭和町1 市民文化会館内 高山市文化協会  
 メールアドレス mail@takayama-bunka.org
- 締め切り** 9月1日(火)(当日消印有効)

**「お月見歌会」**  
 (優秀作の発表、講評、賞品授与、歌会、雁部貞夫先生講演)  
 日時 10月3日(土) 午後1時30分～  
 場所 高山市文化伝承館(高山市城山)

何しろ、当時は適切な会場とて無く、市農協の会議室や労働会館の会議室をよくお借りした。こうした催しの詳細は、遠い日の事でもあり記憶が曖昧だが、特に印象に残ったのが昭和四十六年に労働会館で行われた、高木東六氏の講演会。自らピアノを弾きながら、クラシック風やジャズ風と

- ◆会場 飛驒・世界生活文化センター
- ◆料金 全席自由 二千元、高校生以下 無料
- ◆日時 八月十六日(日) 午後三時三十分
- ◆会場 文化会館大ホール
- ◆入場無料
- ◆日時 八月三十日(日) 午前九時
- ◆会場 文化会館三階講堂
- ◆入場無料

「死なないで」とは言えなかつた時のその涙は、腹の底からの種の保存本能のような命の叫びだったと思う。

また八月十五日が来る。

(ガンモン毛筆)